

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 87

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

人との出会い・繋がり
に恵まれた大学人生活を
ありがとうございます。

福岡大学名誉教授 宮本 新吾



2004年4月より福岡大学に着任し、19年間主任教授を含めて大学人として過ごさせて頂きました。お陰様で、多くの方に巡り会うことができました。大学人として上位の地位にいたことで、教育、臨床、研究、社会活動に携わりやすい環境が提供されていたと退官してさらに感じています。

教育の面では、学生教育に朔医学部長時代より医学生の心構えをつけるために行われた白衣授与式は、非常に良い式と思いました。このような「けじめ」を着けさせることで、メリハリのある学生生活を送ることができます。また、同窓会が積極的に学生教育に関わっていることも、周囲の皆で学生を育てようという意図が見えて非常に学生諸君が羨ましく思いました。また、大学院生や研究者を積極的に表彰する姿勢も、教室づくりの中で大いに励まされました。これこそ、人と人との繋がりによる教育です。

臨床では、垣根の無い診療がなによりもまず素晴らしい点だと思います。特に救急診療が一部を占める産婦人科で

は、救命救急、麻酔科、小児科、消化器外科を含めて多くの診療科の医師、看護師に助成して頂き死亡事故なく教授期間を過ごすことができました。このことは、人に恵まれたことそのものです。

研究では、臨床研究支援センター、知的財産センター、研究推進部からの支援で、自己開発による医師主導型治験を3個、自己開発の特定臨床研究を2個、実施することができました。これらの作業は、人の助けがなければできないものです。

医師は、人の命を助ける仕事です。そのような激務の中で、多くの人に助けて頂くことができた大学人生活であったことに深謝しています。在籍している医師に伝えたいことは「頑張っていれば、誰かが助けてくれる」ということです。今後の福岡大学の発展を心よりお祈りいたします。本当に、ありがとうございました。

四半世紀を超した福岡大学での活動を終えて、一言感謝を

福岡大学名誉教授 志村 英生

平成9年に内視鏡外科医として第一外科(現消化器外科)に赴任して参りましたが、大切な使命である外科診療、研究活動とその指導などを行いながら、医学生への教育もまた楽しく充実するものでした。外科の再編や情報管理部門の強化などにより福岡大学での後半は出石先生が命名された医療情報社会学という新しいジャンルの教育を担当することができました。この分野は医療情報学と情報社会学などが融合されたこれからの方向性を示すもので、社会医学の新分野として国家試験にも対応するものでした。これを医学生の必修科目にさせていただいた学部長や教務に関わる先生方の慧眼に感謝いたします。

電子カルテの時代になってその高額なシステム費用に見合うためには、使いやすさとともにデジタル情報化され共有化されたビッグデータの二次利活用が重要と考え、その分析方法を開発し得られた結果を広く提供することを、いろいろ工夫してきました。充分とはいえず、できないことも多かったのですが、少しはお役に立てるものもあったかなと思っており

ます。日々蓄積される情報は膨大であり、ほんの一部しか利活用できていませんが、その一端は例えば臨床研究のサポートや病院経営や働き方改革などに生かされたと思っております。また平成30年には医療情報学連合大会を福岡の国際会議場で開催することができ、その際は病院の医療情報部や看護部などの多数のスタッフの方々にも多大なご協力をいただき大変助かりました。厚く御礼を申しあげます。

九州大学、福岡大学と大学での活動が多かったので普通のことと感じていましたが、他の分野に進んだ同級生たちと話をしていると、福岡大学では医学部だけでなく経済学部や商学部の若い学生達と話を議論していたことが特別に貴重で素晴らしいことだったと気づかされます。このような得がたい職場で26年間活動できた福岡大学に感謝してこの拙文を終えたいと思います。



福岡大学医学会第88回例会および第46回総会

■日時/令和5年9月27日(水) 17:30 ~ 19:15 ■場所/医学部講義棟 3F RI 大講堂

1. 第88回福岡大学医学会例会 【進行】集会幹事 川浪 大治

1) 開会の辞 集会幹事 川浪 大治

2) 会長挨拶 医学部長 小玉 正太

3) 第25回福岡大学医学会賞受賞論文講演 (講演15分、質疑応答含む)

① 講演者…平川 豊文(産婦人科)

座長…四元 房典

「Trophic and immunomodulatory effects of adipose tissue derived stem cells in a preclinical murine model of endometriosis」

② 講演者…橋口 志保(歯科口腔外科)

座長…近藤 誠二

「CCN2-induced lymphangiogenesis is mediated by the integrin $\alpha v \beta 5$ -ERK pathway and regulated by DUSP6」

③ 講演者…眞野 亮介(歯科口腔外科)

座長…近藤 誠二

「Induction of potassium channel regulator KCNE4 in a submandibular lymph node metastasis model」

4) 第25回福岡大学医学会賞金賞論文投票

5) 新任教授講演 (講演25分、質疑5分)

講演者…佐藤 寿彦(呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学) 座長…小玉 正太

「肺癌治療の進歩」

2. 第46回福岡大学医学会総会

1) 議事

【進行】庶務幹事 鍋島 茂樹

① 報告事項 ② 令和4年度会計報告および令和5年度予算案 ③ その他

2) 第25回福岡大学医学会賞授賞式

【進行】集会幹事 川浪 大治

① 開票結果発表 ② 授賞式

3) 閉会の辞 集会幹事 川浪 大治



講演された先生方と
(上段左から、小玉会長、佐藤先生、近藤先生、四元先生、眞野先生、橋口先生、平川先生)

新風

令和5年4月1日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。

new phase



生命医療倫理学
教授

今泉 聡

2023年4月1日付けで生命医療倫理学講座の主任教授を拝命いたしました。私は2002年に福岡大学医学部を卒業後、心臓・血管内科学に入学し、大学院では主に動脈硬化に関する研究に従事致しました。2008年より米国UCLAへ留学し、帰国後も循環器診療と研究に取り組んでおりましたが、2015年に生命医療倫理部門が新設された時より、生命倫理の立場から研究と医療への貢献を目指すこととなりました。この度、皆様のあたたかいご支援のおかげで、新たに生命医療倫理学講座として出発することとなりました。高度な医療の提供にはチーム医療や多職種協働が不可欠であり、「多様な場や人をつなぐ能力」の教育が重要視されるようになりました。これはまさに、倫理的な能力と言えると思います。生命医療倫理は研究の領域にとどまらず、教育や医療を含む全ての領域で重要性を増していると思っております。生命医療倫理の実践には、すべての職種や診療科、研究者の方々との協働が必要不可欠です。今後も多くの方々と連携させて頂きながら、福岡大学の発展と人材の育成に貢献すべく、精進していく所存です。これからもご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



総合診療学
教授

鍋島 茂樹

本年度、福岡大学医学部に「総合診療学」講座が新設され、この度その初代主任教授に選任していただきました。私は1990年に福大を卒業後、九州大学病院総合診療部に入学し、2015年より福大に新設された総合診療部に勤務しています。趣味は剣道です。今回、念願の講座化が実現し、診療だけでなく医学教育と研究に対する責任を有することとなり、襟を正す思いです。現在、人口の高齢化と地域包括ケアシステムへの移行に伴い、地域医療は大きな岐路に立っていますが、総合診療は、これからの地域医療に重要な役割を果たすことが期待されています。特定の臓器・疾患専門領域を持たぬ総合診療医は、広く多様な疾患に対応しており、救急診療の研鑽も積んでいるため、訪問医療や中小病院における内科診療、あるいは大きな病院のホスピタリストに適しているといえます。総合診療学講座は、こういった地域医療の現場

に出ていく、すぐれた人材の育成を第一の任務と考えています。また、研究領域では、感染症や漢方医学の基礎・臨床研究が主体です。皆様のお役に立てるよう頑張りますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



産科婦人科学
教授

四元 房典

令和5年4月1日付けで福岡大学医学部産科婦人科学講座の主任教授を拝命いたしました。私は平成15年に九州大学を卒業し、臨床研修終了後に福岡大学大学院医学研究科博士課程に入学しました。がん標的治療についての研究で学位取得後は、その研究成果を臨床に繋げる事業に携わり、2年間の米国留学後に平成27年から当講座で診療・研究・教育に従事して参りました。

現在、少子化問題は深刻な状況に陥っており、女性のトータルヘルスケアへの意識が求められるようになってきていますので、複数の診療科と多職種から構成されたチーム医療による無痛分娩や妊産婦メンタルヘルスケア、働く女性の生活の質の維持・向上のために外来で行うホルモン治療やロボット手術を含めた内視鏡手術、妊娠するための機能温存を必要とする若年がん患者様への支援に取り組んでいます。

これまで福岡大学の多くの方々にご支援いただき、教育者としても成長させていただきましたご恩に報いるためにも、医師に必要な知識や技能だけでなく患者に寄り添うことのできる医学生の育成にも貢献できるように尽力していきます。今後とも皆様からのより一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。



医療情報部
教授

吉田 陽一郎

2023年4月1日付けで、福岡大学病院医療情報部の教授を拝命いたしました。1996年に産業医科大学を卒業し、2010年より福岡大学病院消化器外科で仕事をさせていただき、2020年4月に医療情報部の診療部長に就任させていただいておりました。医療情報部の英語表記は、これまでClinical Information Centerでありましたが、Medical Informatics&Digital Medicineへの変更が認められ、対外的にはMedical Informatics&Digital Medicineで活動していきたいと考えています。

これからの医療の発展はデジタル化抜きでは成し遂げることが困難と考えられており、様々な分野でのAIの活用、IoTのユビキタス化を軸に診断・治療方針の決定・治療にいたる全てのプロセスがデジタル化の対象となっております。囲碁や将棋の世界では既にAIは人間を凌駕し、AIから学ぶことによって更なる発展のスタートに繋がっています。またChatGPTの衝撃的な登場により、誰もが簡単にAIを使える世の中になってしまいました。そういった中で、更なる医療の発展への思いを込めてMedical Informatics&Digital Medicineと命名させていただきました。よろしくお願い申し上げます。

看護学科
教授

櫟 直美

令和5年4月1日付けで福岡大学医学部看護学科教授を拝命いたしました。私は産業医科大学医療技術短期大学を卒業後、地元の九州労災病院で11年間看護師として脳神経内科・外科、整形外科など多くの診療科で臨床経験を積みました。その経験において様々な看護の課題に直面したことが契機となり看護教育に移り、看護専門学校専任教員を経て、短期大学そして福岡県立大学看護学部で27年間老年看護の教育と研究に取り組んできました。現場では前例のない超高齢社会を背景に老年看護の質の向上への期待は大きく、認知症の人や高齢者を深く理解し支援するために北九州市立大学社会システム研究科で多職種協同支援の在り方を探求し学位を取得しました。研究には苦手意識ありましたが、その成果は自身の成長のみならず老年看護教育や地域貢献に大いに役立ち、認知症高齢者とその家族への支援として実践活動に繋げることができました。今後も福岡大学において高度保健医療福祉社会の実現に貢献できる人材として実践能力を備えた看護師の育成に力を注ぎたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

健康管理センター
教授

岩田 敦

このたび、2023年4月1日付で福岡大学健康管理センターの教授を拝命致しました。私は1997年に福岡大学医学部を卒業し、今の内科に再編される前の福岡大学第二内科へ入局しました。専門は循環器内科、特に心血管カテーテル治療や心臓救急医療です。高血圧や脂質異常症などの生活習慣病の診療にも長年従事しています。また、動脈硬化の病態、治療に興味を持ち、研究を続けてきました。予防医学にも興味を持ち、数多くの方の健康診断を行った経験があります。さらに労働衛生コンサルタント、産業医の資格を取得し、一般企業における従業員の健康管理を行ったこともあります。長時間労働やメンタル不調などの問題を抱える従業員に対する面接指導（産業医面談）も数多く経験しました。このような経験を活かし、私の母校である福岡大学の学生、職員が心身共に健康で活躍できるように貢献したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

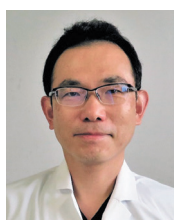
解剖学
准教授

貴田 浩志

令和5年4月より立花克郎教授の御推挙により、福岡大学医学部解剖学講座准教授を拝命いたしました。私は平成18年に久留米大学医学部を卒業し、初期研修を経て同大の呼吸器・神経・膠原病内科に入局いたしました。神経内科を専攻し、幅広い疾

患の症例を経験させていただきました。神経内科専門医を取得後、平成25年に大学院に進学し、同大の高次脳疾患研究所にてRett症候群の病態解明研究に取り組みました。また、平成29年から1年間は神奈川県のカイフロンにあるナノ医療イノベーションセンターに国内留学させていただき、ナノミセル型薬物送達システム(DDS)を用いたmRNAの医薬応用研究に携わる機会を頂きました。平成30年に福岡大学医学部解剖学講座に採用いただき、現在に至っております。

現在は、医学部生への解剖学講義、実習指導の傍ら、超音波・ナノバブル、さらにはペプチドを用いた生体組織への遺伝子送達キャリアの開発研究を行っております。中枢神経を標的として、神経変性疾患の遺伝子治療に応用できる革新的なDDSの開発を目指して、一生懸命研究を続けております。福岡大学の発展のため尺力して参る所存です。ご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

放射線医学
准教授

高山 幸久

令和5年4月1日付けで、吉満研吾教授のご推挙により福岡大学医学部放射線医学教室准教授を拝命致しました。私は平成12年(2000年)に九州大学医学部を卒業し、同大の放射線科に入局しました。その後、九州大学病院や関連病院にて、主に体幹部のCTやMRI、血管造影による画像診断やIVR(インターベンショナルラジオロジー)による診療や研究に携わって参りました。令和3年4月より、福岡大学へ赴任し、現在に至っております。各診療科の先生方との診療や研究において、少しずつ関係を深め、貢献できる範囲を増やしています。来年は新本館での診療も開始致します。それに伴い、画像診断やIVRにおきましても、最新の医療機器が導入されます。それら機器の性能を最大限に活用し、放射線科医の知識と技術と融合させ、各診療科の先生方の診療や研究に役立てることが責務と考えております。まずは相談して頂ければ幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

看護学科
准教授

大田 博

令和5年4月より福岡大学医学部看護学科臨床看護分野成人看護学の准教授を拝命いたしました。私は、看護師として約20年の臨床経験と大学教員として約10年の教育経験のなかで、看護学修士(東京都立大学)、応用情報科学博士(兵庫県立大学)の学位を取得し、令和2年4月に福岡大学に着任致しました。着任後は、学部における成人看護学や情報学に関する教育や研究、大学院の高度実践看護師コース(クリティカルケア看護領域)の教育に関わって参りました。また、医療情報システムにおける看護用語マスター開発や導入支援の経験から、福岡大学病院の電子カルテシステムに関するお手伝いもさせていただいております。今後も、臨床実践系の教育研究活動と、応用情報系の教育研究活動をバランスよく、また、融合させた取り組みを行っていきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



看護学科
准教授
坂梨 左織

令和5年4月1日付で、福岡大学医学部看護学科の准教授を拝命いたしました。私は平成10年に大分医科大学医学部看護学科を卒業し、同大学附属病院で看護師として9年間勤務した後、九州大学大学院で学位を取得しました。私の専門は基礎看護学であり、臨床経験を活かしながら、家族支援および看護学教育に関するデジタル技術を活用した実証研究や評価方法の構築に取り組んでいます。教育においては、時代や医療の変化に対応できる看護職者の育成を目指し、医学教育推進講座との連携を図りながら、模擬患者を用いたシミュレーション学習を実施しています。また、令和5年度からは、看護部の臨地実習指導者と協力して客観的臨床能力試験を開始しました。福岡大学医学部は多様なリソースを有しており、それらを活用できることが強みだと感じています。これらの要素を生かし、創造性と想像力を発揮しながら、教育と研究の両分野で努力して参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



消化器外科
准教授
梶原 正俊

長谷川傑教授のご推挙により、令和5年4月付で福岡大学病院消化器外科准教授を拝命いたしました。大学時代そして外科医生活のほとんどを関西で過ごしてまいりましたが、令和2年2月より地元である福岡に戻り、福岡大学病院消化器外科で肝胆脾外科診療に携わっております。

近年肝胆脾外科領域にも低侵襲手術（MIS; minimally invasive surgery）が急速に普及し、当科でも安全性を担保しつつ、肝胆脾領域の腹腔鏡下手術を積極的に導入してまいりました。そして更に精緻な手術が可能なロボット支援下手術（肝切除および尾側脾切除）を令和4年11月から開始し、順調に症例を蓄積しております。

令和5年春には、新たに肝臓と脾臓、合わせて2名の日本内視鏡外科学会技術認定医が誕生、加えて福岡大学病院が日本肝胆脾外科学会の定める高度技能専門医修練施設に認定され、消化器外科肝胆脾グループの成長を実感しつつあります。消化器内科や放射線科、病理診断科の先生方との連携も理想的で、この恵まれた環境に感謝しつつ、引き続き最新の肝胆脾外科診療を提供できるよう尽力してまいります。ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



脳神経内科
准教授
三嶋 崇靖

2023年4月1日付けで、坪井義夫教授のご推挙により、福岡大学病院脳神経内科准教授を拝命致しました。私は2008年に福岡

大学医学部を卒業し、佐世保共済病院、九州大学病院で初期研修を行い、2010年に神経内科・健康管理学（脳神経内科学）教室に入局致しました。2012年に福西会病院で勤務した後、大学院に進み、大学院在学中に京都大学iPS細胞研究所、メイヨークリニックフロリダに留学致しました。2017年に帰国し、2021年からは病棟医長として脳血管障害から神経変性疾患まで幅広く診療しております。特にパーキンソン病診療ではデバイス補助療法なども積極的に行っております。ライフワークは遺伝性パーキンソン病関連疾患であるPerry病（指定難病126）研究で、新たな家系の発見、臨床病理学的特徴の確立、国際診断基準の作成を行い、基礎研究ではiPS細胞や遺伝子改変マウスを用い、病態解明研究を行っております。Perry病との出会いから遺伝カウンセリングにも興味を持ち、遺伝性の神経変性疾患を中心に遺伝カウンセリングを行っております。2022年からは神経疾患のオンライン遺伝相談も開始致しました。今後は診療、研究、教育で、福岡大学の発展のため尽力して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



臨床検査・輸血部
准教授
森戸 夏美

この度、小川正浩教授のご推挙によって2023年4月より福岡大学病院臨床検査・輸血部 准教授を拝命いたしました。

1995年に福岡大学医学部を卒業して、当時の福岡大学第二内科に入局し福岡大学病院、筑紫病院での研修を経て循環器内科を専攻し、その後、大学病院や関連病院で多くの循環器疾患に携わり修練を積んできました。専門は心臓超音波検査で、心機能評価、心不全診断や治療評価、弁膜症の評価などを中心に診療、研究に携わってきました。2013年4月からは福岡大学 健康管理センターに所属して学生、職員の救急対応や健診評価を行い、改めて予防医学の大切さに気づくことも出来ました。

今回所属する臨床検査・輸血部はすべての診療科の診断や治療に関わる重要な部門だと思います。私は輸血責任医として新たな取り組みとなり、責任の重さに身が引き締まる思いです。診療科の先生をはじめ多く病院スタッフ皆様のご理解とご協力のもと、安全で適切な輸血医療を行えるように支援して行ければと思っております。福岡大学病院の発展のために尽力して参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



呼吸器・乳腺内分泌・小児外科
准教授
早稲田 龍一

この度、佐藤寿彦教授のご推挙により、福岡大学病院、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の准教授を拝命致しました。私は、2001年に金沢大学を卒業し、同学の心肺・総合外科に入局しました。全ての外科領域を扱う大外科講座で幅広い外科修練を積んだ後、当時は殆ど普及していなかった手術支援ロボット（da Vinci）を活かした呼吸器外科領域の術式開発を学位研究で取り組んだことを機に、呼吸器外科医に専従しました。その後も同学の臨床・研究・教育に従事、2014/15年にはオーストリアのウィーン医科大

学に臨床留学の機会を頂きました。ウィーンでは、私のライフワークである肺移植医療に加え、日本では珍しい中枢気道狭窄に対する外科治療を数多く経験しました。帰国後も肺移植医療に携わることを希望していたところ、岩崎昭憲前教授（現福岡大学病院長）のご厚意により2016年4月から呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の一員に加えて頂き、はや7年が経ちました。

今後も、福岡大学における肺移植医療、佐藤教授が推進する最新の肺癌低侵襲治療の発展、さらに学生や若手医師の教育に貢献すべく精進して参ります。どうぞ皆様ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。



病理学
講師

青木 光希子

この度、濱崎慎教授のご推挙により福岡大学病理学講座 講師を拝命いたしました青木光希子（あおきみきこ）と申します。私は1999年に宮崎医科大学医学部（現宮崎大学医学部）を卒業し、同年福岡大学第一内科（現腫瘍血液感染症内科）に入局いたしました。入局後は、福岡大学、福岡徳洲会病院で研修し、2003年より福岡大学医学部大学院医学研究科において病理学を専攻し、岩崎宏教授、鍋島一樹准教授（当時）にご指導賜りました。悪性末梢神経鞘腫（MPNST）の細胞株を用いた研究を行い、大学院卒業後は2007年より病理部の助手、2010年より病理学講座の助教を経て現在に至ります。

病理学講座に所属しておられた恩師の先生方が次々と定年を迎えて大学を去られていく中、病理診断業務の比重はますます高くなり、日々診断に追われて過ごしております。目まぐるしくアップデートされる新たな分類や分子遺伝学的情報を取り入れながら、病理医として、迅速で正確な診断を心がけつつ、丁寧に信頼される仕事を積み重ねていきたいと思ひます。また、診療のほかには鍋島一樹先生の研究テーマの一つである癌の浸潤メカニズムに関わる分子の研究を細々と続け、学部学生と関わり、大学院生の指導、各科との臨床病理カンファレンスも積極的にに行い、医学部・病院の発展に尽力したいと考えます。今後ともご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



法医学
講師

高山 みお

この度、久保真一教授の御推挙により、令和5年4月1日付で、福岡大学医学部法医学教室講師を拝命いたしました高山みおと申します。私は平成23年に佐賀大学を卒業し、初期研修終了後、平成29年に福岡大学大学院医学研究科社会医学系専攻博士課程を修了致しました。その後、福岡大学医学部法医学教室に所属し、法医病理の研究を行いながら、法医解剖や検案の経験を積んで参りました。

令和元年から約2年間、東京都監察医務院の監察医として行政解剖、検案を数多く経験させていただきました。令和3年からは、再び福岡大学医学部法医学教室にて法医実務や研究を行い、忙しいけれども充実した日々を送っています。今後も福岡大学

医学部の教員として教育に関わりつつ、研究を行い、自己研鑽し続けていく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



医学教育推進講座
講師

武岡 宏明

このたび、安元佐和教授のご推挙により令和5年4月1日付で福岡大学医学部医学教育推進講座講師を拝命いたしました。私は、平成14年福岡大学医学部卒業後、九州大学病院総合診療科に入局しました。九州大学病院、長崎県壱岐での離島医療、九州大学大学院での臨床研究での学位取得、九州医療センター勤務を経て、平成22年母校である福岡大学に卒業後初めて戻り、総合診療部での勤務となりました。平成29年10月より福岡大学博多駅クリニックにて、クリニック業務を経験致しました。令和3年に再度福岡大学病院総合診療部に戻り、総合診療部の実習計画再考を行いました。令和4年4月1日より現在の医学部医学教育推進講座に異動し、1年生から6年生の学生指導ならびに外来診療を通じて教育も並行して行っております。同年新一年生の副担任も務めており、もともと医学教育に興味があったため、学生と6年間ともに成長、学んでいきたいと思ひます。自分のモットーは、笑顔で明るく誠実にです。今後も福岡大学の発展のために少しでも貢献できるよう精進したいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

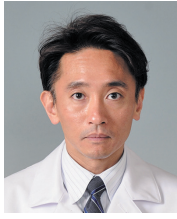


消化器内科
講師

芦塚 伸也

平井郁仁教授のご推挙により、2022年4月1日付けで福岡大学医学部消化器内科講師を拝命いたしました。私は1999年に宮崎医科大学を卒業し、同第一内科学講座に入局しました。消化器研究室配属後大学院へ進み、アドレノメデュリン（AM）という生理活性ペプチドの基礎研究に従事しました。AMは宮崎医科大学で発見された血流改善・抗炎症作用・臓器保護作用を有するペプチドであり、私は幸運にもAMが炎症性腸疾患（IBD）モデル動物へ治療効果を示すことを発見できました。大学院修了後に福岡大学筑紫病院消化器内科へ国内留学し、講師であった平井先生より熱いご指導を頂き、IBD診療の基礎を身につけることができました。2007年に宮崎大学へ戻り、IBD診療に従事するとともに、AMを用いた創薬研究を進め、医師主導治験として第2相まで進めることができました。AM研究の更なる発展を模索する中、福岡大学病院に炎症性腸疾患先進治療センターが開設され、平井教授よりお声がけ頂きました。IBD診療能力の向上とAM研究推進への期待、およびに福岡大学への恩返しを胸に、大学移籍を決断いたしました。

福岡大学の発展に尽くし、AM創薬研究を進めたいと存じます。また、宮崎大学では卒後臨床研修センターにも属しておりましたので、学生・研修医教育にも注力する所存です。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



内視鏡部
講師

石田 祐介

令和5年4月1日より平井郁仁教授のご推挙により、福岡大学病院消化器内科・内視鏡部講師を拝命致しました。私は平成12年(2000年)に長崎大学を卒業し、久留米大学消化器内科で消化器内科医としての修練を積んで参りました。特に胆道膵臓領域を専門としていたこともあり、平井教授にお声掛け頂き、令和2年4月より福岡大学医学部消化器内科学講座へ入局させて頂きました。その後は胆膵研究室を立ち上げ、従来消化器外科の先生方が担当されていた胆膵疾患を消化器内科が診療の窓口となれるよう、画像診断・内視鏡診療・化学療法などの指導を行って参りました。

胆膵領域は近年内視鏡診療が劇的に発展しており、診断のみならず低侵襲治療の一翼として無くてはならないものとなっています。結石等の良性病変による救急疾患から悪性腫瘍まで担当領域は多岐に渡りますが、内視鏡を中心とした内科診療の面白さを若い先生に伝えていければと思います。もちろん消化器外科・放射線科・病理の先生方のご協力により診療が成り立っており、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また難治癌として挙げられることの多い領域であり、臨床基礎問わず関係各科との連携の強みを活かした福岡大学ならではの研究を進めて参ります。未熟者ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



筑紫病院消化器内科
講師

小野 陽一郎

植木敏晴教授の御推挙により、2023年4月1日付けで福岡大学筑紫病院消化器内科講師を拝命いたしました。私は、2003年に福岡大学医学部を卒業し、2005年に福岡大学筑紫病院消化

器科に入局いたしました。入局後は、当院や関連病院での臨床経験を積み、2012年にクローン病に対する生物学的製剤による治療に関する臨床研究で学位を取得させていただきました。以降は、消化管形態学、特に食道病変に対する内視鏡を中心とした診療、研究に従事しています。近年では、耳鼻いんこう科や麻酔科、手術部の協力のもと、中下咽頭領域の病変に対する内視鏡診療、研究も行っています。

このように多くの貴重な診療経験や研究の機会に携わっていることは、尊敬する上司や同僚、後輩、外科や病理部をはじめとする他科の先生、そして患者さんに恵まれ、温かいコメディカルスタッフや医局秘書の方に支えられているからであることを改めて実感しています。微力ではございますが、医療の発展に貢献し、当科の伝統を継承できるよう、我以外皆我師の気持ちを忘れずに粛々と歩む所存です。



筑紫病院消化器内科
講師

金光 高雄

この度、植木敏晴教授のご推挙により2023年4月福岡大学筑紫病院消化器内科講師を拝命致しました金光高雄と申します。私は、2005年島根大学を卒業し、初期臨床研修を経て、2007年福岡大学筑紫病院消化器内科に入局しました。関連病院や病理部での研鑽ののち、2015年福岡大学大学院医学研究科病態構造系専攻博士課程を修了致しました。2017年から福岡大学筑紫病院へ戻って以降は、八尾建史教授のもと、主として胃癌の診断と内視鏡治療に従事して参りました。筑紫病院へ紹介頂く患者様は範囲診断に苦慮する症例や、内視鏡治療の適応を満たし得ない難解な症例が多く、日々大変勉強になっています。特に最近は画像強調内視鏡を用いた胃癌リスクの層別化の研究に力を入れており、大学で勤務させて頂いているうちに世の中の役に立つ知見が得られればと思っております。今後は自分の診療や研究だけでなく、微力ではありますが医学部・病院の発展に尽力する所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

学位取得 次の方は、福岡大学より博士(医学)を授与されました。

課程修了による学位取得者 [令和5年3月16日付け]

- | | | |
|----------------|----------------|------------------|
| ・橋本 小百合(人体生物系) | ・藤田 潤 (病態機能系) | ・毛利 紀之 (先端医療科学系) |
| ・竹下 翔 (病態構造系) | ・宮崎 弘太郎(病態機能系) | ・坂本 篤彦 (先端医療科学系) |
| ・眞野 亮介 (病態機能系) | ・山崎 裕太郎(病態機能系) | ・長野 秀紀 (先端医療科学系) |
| ・石田 晋太郎(病態機能系) | ・中山 鎮秀 (病態機能系) | ・林 貴臣 (先端医療科学系) |
| ・木村 翔一 (病態機能系) | ・中野 涼子 (社会医学系) | ・東 沙羅 (先端医療科学系) |
| ・杉野 裕記 (病態機能系) | ・林 礼雄 (社会医学系) | ・藤井 秀幸 (先端医療科学系) |
| ・田中 秀明 (病態機能系) | ・三股 亮介 (社会医学系) | ・森田 英剛 (先端医療科学系) |

論文提出による学位取得者 [令和5年3月16日付け]

- | | |
|----------------|----------------|
| ・田中 秀明 (病態構造系) | ・坪内 和女 (病態構造系) |
|----------------|----------------|



看護学科
講師

神徳 和子

2023年4月より福岡大学医学部看護学科の基礎看護学領域に講師として着任いたしました。私は、1997年に佐賀医科大学医学部看護学科卒業後、広島市民病院、名古屋大学附属病院、長崎県の透析専門施設で臨床経験を積みました。高度専門化する医療現場で患者様が意思決定していくことの難しさを透析専門施設で実感し、佐賀大学大学院医学系研究科で、慢性透析患者の意思決定に影響を及ぼす要因について研究しました。また、生活習慣病を起因とする慢性腎臓病(CKD)は、運動療法で進行を緩やかにできると考え、2016年から福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科の博士後期課程に在籍し、CKD患者の運動療法について研究しました。疾患進行予防の看護介入も重要だと考え、今後もCKD発症・進行予防のための研究に力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

大学教育においては、神戸市看護大学、宇部フロンティア大学、山口大学、帝京大学福岡医療技術学部の成人看護学、基礎看護学、小児看護学で講義・演習、実習指導に携わってきました。高度専門化する医療現場に適応できる学生の育成に尽力したいと思っています。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



総合周産期母子医療センター
講師

小幡 聡

令和5年4月1日より福岡大学病院総合周産期母子医療センターの講師として着任いたしました。私は平成19年3月に長崎大学医学部を卒業後、初期臨床研修を佐賀県立病院好生館(現佐賀県医療センター好生館)にて過ごしたのち、九州大学小児外科学教室へ入局いたしました。好生館、九州大学病院、北九州市立医療センター、などで外科医・小児外科医としての修練を積み、平成24年より4年間九州大学大学院医学系学府医学専攻へ入学、小児外科教室

で小児内視鏡外科手術トレーニングについての研究をさせていただき、学位を取得いたしました。大学院卒業後は九州大学病院にて主に小児消化管疾患(ヒルシュブルング病、鎖肛)、内視鏡外科手術を中心に臨床・研究・教育に携わり、平成31年4月より小児外科教室の医局長を務めさせていただきました。

福岡大学病院に着任後もこれまで同様、小児医療に尽力していく所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



精神神経科
講師

菅原 裕子

この度、川崎弘昭教授のご推挙により、2023年4月1日付で福岡大学病院精神神経科講師を拝命致しました。私は2003年に筑波大学医学専門学群を卒業後、東京大学医学部附属病院での外科研修を経て、2007年に東京女子医科大学病院神経精神科へ入局しました。2011年に同大学大学院博士課程修了し、理化学研究所脳科学総合研究センター・精神疾患動態研究チームの연구원として気分障害のエピゲノム研究に従事した後、関連病院での臨床研修を経て、2014年より東京女子医科大学病院神経精神科助教として帰局しました。その後熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座助教、関西労災病院精神科部長を経て、現職に至ります。

西日本有数の大学病院・特定機能病院である福岡大学病院においては、リエゾン精神医学は総合病院の中核的臨床機能であることから、他科との連携が重要です。さらに精神科診療は常に多角的アプローチが求められることから多職種連携が必須です。また、病態解明に至っていない精神科医療においては、現時点でのエビデンスに基づいた診療を行いながら、日々の臨床疑問を研究に繋げ、その結果を臨床に還元する、ということが求められています。こうしたことをふまえて、研修医ならびに学生教育に力を注ぎ、精神科医療全般の発展と福岡大学病院におけるあたたかい医療に真摯に貢献していきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

祝 第25回福岡大学医学会賞



橋口 志保
(歯科口腔外科)

CCN2-induced lymphangiogenesis is mediated by the integrin $\alpha v\beta 5$ -ERK pathway and regulated by DUSP6
Sci Rep. 2022 Jan 18;12(1):926



平川 豊文
(産婦人科)

Trophic and immunomodulatory effects of adipose tissue derived stem cells in a preclinical murine model of endometriosis
Sci Rep. 2022 May 16;12(1):8031



眞野 亮介
(歯科口腔外科)

Induction of potassium channel regulator KCNE4 in a submandibular lymph node metastasis model
Sci Rep. 2022 Aug 1;12(1):13208

教室だより
Letter from a classroom



再生・移植医学

再生・移植医学講座は膵島移植（糖尿病に対する細胞移植治療）研究を担当するグループが母体となり開講された、再生医療に関連するトランスレーショナル・リサーチを行う基礎医学講座です。

再生医療は細胞や細胞外基質などからなる再生医療製品を用いて組織や臓器の修復を目指す医療であり、優れた再生医療製品の開発はその推進に不可欠です。われわれは人工尿道チューブの開発（Mikami H, et al. 2012）、脂肪幹細胞を用いた副腎の再生研究（Tanaka T, et al. 2020）、脂肪幹細胞を用いた膵島移植研究（Takahashi H, et al. 2019, Sakata N, et al. 2020, Sakata N, et al. 2022）といった各種の再生医療研究を推進しています。加えて、「（血管）リンパ管新生とその制御」に基づく治療研究チームを学内で組織し、リンパ管新生による様々な臨床応用の可能性を探索しております。これまでにリンパ管新生が虚血肢の改善をすること（Kuwahara G, et al. 2013, Kuwahara G, et al. 2014）、創傷治癒を促進すること（Naito R, et al. 2014）、癌転移の抑制に有効であること（Hashiguchi S, et al. 2021, Mano R, et al. 2022）を示しています。最近では、臨床応用を目指した異種移植研究として、ブタ間葉系幹細胞移植の下肢虚血、糖尿病性潰瘍に対する治療効果（Yamada H, et al. 2021, Yamada H, et al. 2022）、カプセル化技術を用いたブタ膵島異種移植（Itoh T, et al. 2016, Itoh T, et al. 2017）を展開し、度々マスコミからの取材をはじめプレスリリースも行っています。

当講座には再生医療センターとして再生医療を提供する臨床部門があり

ます。こと臨床膵島移植に関しては、その推進のために当講座は先進医療を行う認定施設として責務を果たしてきました。同種膵島移植は2020年より保険医療としての提供が認可され、当院では厳しい施設基準を満たし特掲診療として提供しています。膵島移植には低血糖症状を緩和し、インスリン使用量を減量させる効果が期待できることから、その展開によって、数多くの糖尿病患者の身体的負担が軽減されるものと期待されます。現在は「慢性膵炎等に対する膵全摘術に伴う自家膵島移植術」の多施設共同試験が始まります。さらに異種膵島は脂肪加工物として、（幼若）カプセル化ブタ膵島を用いる治験も準備中です。

当講座が開講以来目指してきたところは、再生医学・移植医学に関連する優れた基礎研究・橋渡し研究の推進、九州地方における再生・移植医療の発展です。詳細につきましては当講座のHP（<https://www.med.fukuoka-u.ac.jp/regenerative/>）をぜひご覧下さい。（文責：坂田直昭）



長い間ありがとうございました

令和5年3月1日～令和5年9月30日までに退職された方

- 宮本 新吾 教授（産科婦人科学）
- 久木原 博子 教授（医学部看護学科）
- 志村 英生 教授（臨床医学研究センター）
- 松岡 弘文 准教授（腎泌尿器外科学）
- 吉川 千鶴子 准教授（医学部看護学科）

- 馬場 みちえ 准教授（医学部看護学科）
- 宗正 みゆき 准教授（医学部看護学科）
- 熊川 みどり 准教授（輸血部）

以上、3月31日付け

教室だより Letter from a classroom



放射線医学

放射線科は、医学部では放射線医学教室として、大学病院では放射線部第一、第二にて活動しています。吉満研吾主任教授、長町茂樹放射線第二教授を中心に、各医局員は、神経画像診断部門、体幹部画像診断・IVR部門、核医学部門、放射線治療部門に分かれ、診療、教育や研究を行っています。また、福岡大学筑紫病院、白十字病院を関連病院として、医局員が赴任し、各病院の診療へ従事しています。

神経診断部門は、脳神経領域、頭頸部領域（耳鼻咽喉科や口腔外科）、整形外科領域の骨軟部領域、四肢などのCTやMRIの画像診断を担当しています。体幹部画像診断・IVR部門は、体幹部（胸腹部）のCTやMRI、USの画像診断などを担当しています。以前は、体幹部画像診断とIVRは別の部門として診療しておりましたが、昨今の医療環境の変化、放射線診断専門医の業務量増加等が重なり、現在は一つのグループとして活動しています。IVRは、vascular IVR（TACE、緊急止血術等の経血管的カテーテル治療、中心静脈ポート留置術等）、nonvascular IVR（経皮的針生検やドレナージ術等）を行っています。新病院では、最新のCanon社製320列CT Aquilion One、Philips社製MRI Ingenia Elition 3.0T、Canon社製Angio CT装置（Alphenix Sky+と80列CT Aquilion PRIMEの組合せ）が導入されます。人工知能を用いた高画質の画像が得られ、診療や研究に貢献できると思います。また、2022年11月より富士フィルム社製医用画像情報システムSYNAPSEが導入されました。こちらも人工知能を用いた画像診断補助システムが目玉です。研究面では人工知能や機械学習を用いた画質改善、造影CTを用いたECV(extracellular volume fraction)による肝、脾臓の評価等を遂行中です。

核医学部門では、認知症診断等の脳核医学、心臓核医学診断と共に、 ^{18}F FDG-PETを中心に、診療や

研究を行っています。新病院では最新のSiemens社製PET・CT装置（Biograph Vision）が導入され、従来の機種よりも質の高い画像を提供できます。また、神経内分泌腫瘍に対するルテチウム治療（Lu-177）が保険適応となったことを踏まえ、福岡大学病院でも治療を行えるように環境作りを進めている最中です。また、アミロイドPETは現在保険未適応ですが、近年中に保険適応になることを期待し、人材育成と環境作りを進めています。

放射線治療部門は、2021年1月よりVarian社製のHalcyonが稼働し、強度変調放射線治療（Intensity Modulated Radiation Therapy: IMRT）、定位放射線治療に活用しています。新病院では最新のVarian社製TrueBeamが導入されます。その一方で、福岡大学病院にて長年診療に用いておりました遠隔操作密封小線源治療装置（Remote After Loading System: RALS）は今年廃棄され、更新されませんでした。経営効率上致し方無い面もありますが、専門医教育機関である大学としては残念なことであります。

これからも放射線科は画像診断・IVR、核医学・放射線治療において貢献してまいりますので、よろしくお願いいたします。

（文責、令和5年度放射線科医局長 高山幸久）



医師国家試験 結果報告

第117回医師国家試験（令和5年2月4～5日実施）に118人が受験し、105人（新卒102人・既卒3人）が合格しました。合格率は89%、新卒のみの合格率は91.1%でした。

看護師・保健師 国家試験結果報告

第112回看護師国家試験（令和5年2月12日実施）に112人（うち既卒者2人）が受験し、110人が合格しました。合格率は98.2%、新卒者の合格率は100%。
また、17人（新卒）が第109回保健師国家試験（令和5年2月10日実施）を受験し、17人全員合格しています。合格率100%。